

日本経済大学大学院教授

叶芳和

円安(ドル高)の影響と農業

日本経済大学大学院の叶芳和教授は、円安ドル高が当面は続く可能性が高いと予想する。そうなった場合に農業にはどんな影響が出てくるのか。また、それに耐えうる産業構造をどう築いていけばいいのか。数々の著作で「農業経営者」という言葉を使い、本誌の創刊に大きな影響を与えた同氏に編集長の昆吉則が聞いた。

(取材・まとめ/窪田新之助)

ドルの出口戦略とついでに 円安

昆吉則(本誌編集長) 本日まで伺いたいのは円安ドル高と農業への影響です。そもそも円安が起きているのはアベノミクスが理由なんですか？

叶芳和(日本経済大学教授) アベノミクスもあるけれども、米国による金融政策、量的緩和の出口戦略が大きいですね。日銀の黒田総裁は少なくとも2年間続けることになって

いるんですが、その間にアメリカの出口戦略がとられると、急速に円安が進むでしょう。

昆 円安はまだ進みますか。

叶 今日の為替レートを見ていると1ドル100円ぐらいだったけど、110円、120円、あるいはそれ以上になる可能性があります。

昆 それは日本の農業、とくに輸入飼料に頼っている酪農にどう響いてきますか？

叶 酪農の場合には規模拡大が進められてきましたよね。飼料を輸入することで土地の零細性の制約から解

放されたわけです。原料を輸入する限り、円高のときにはもうかるわけですから今までは良かった。メガファームほど輸入依存度が高いので、1ドル70円台のときなんか、メガファームは相当にもうかった。逆にいえば、円安になるとコスト上昇に見舞われるわけです。小さい農家で飼料の自給度が高い場合、それほど影響はありません。

昆 飼料自給率の高さによって変わるといふことですね。

叶 そう。それで問題は、政府は規模拡大でコストダウンし、自立していく農家を育成するのが本来の目的なわけですが、円安は逆に自立に向かわせる規模拡大農家を殺してしまふという矛盾がある。僕はアベノミクスの大矛盾だといっているけどね。円安は輸出にはプラスだけど、

輸入にはマイナスに働く。それが一つの矛盾。加えて政策として育てなければいけない自立農家を殺してしまうことになる。つまり二つの矛盾が重なっている。

ライ麦の裏作で1石5鳥

叶 それで円安と規模拡大が両立する、円安にも耐えられる産業体質をどうやって作っていくかということですが、まずは粗飼料の自給率を高めれば良い。飼料給与の4割は粗飼料。この分を自給できるようにすれば、為替レートに影響を受けない経営に近づけるわけです。

昆 そうですね。

叶 それで僕がいま提案しているのは水田裏作でのライ麦なんです。ラ

イ麦なら田植えが始まる前までに収穫できる。転作奨励金は出ませんが、コメを作りながら裏作でやるわけです。これは「1石5鳥」ですよ。

昆 1石5鳥ですか（笑）

叶 というのは飼料を自給できる、飼料代は安くなる。それを自給するためにコントラクターを使えば雇用も生まれ、そして畑から牧草をもらい堆肥で返す循環型農業になっていく。それからコメ農家に借地料を払うから、水田農家は潤う。

昆 なるほど。

叶 日本の乾草輸入量は200万tあります。これをすべて国産のライ麦で代替すると、100万haの水田裏作が必要ですね。ちなみに、現在の水田面積（主食用）は152万haありますから、これは十分可能です。また、ライ麦の収量は1ha当たり2tですから、借地料1ha7万円（裏作分）の場合、酪農家は3万5000円でライ麦1tを取得できます（コントラクター料金別）。これは輸入と同じですよ。借地料として1ha当たり7万円を負担すれば、輸入と同じ価格で乾草を確保できるわけです。規模拡大などのメリットを考えれば、不可能な数字ではないと思いますね。

物質循環としての自給飼料

昆 自給飼料の取り込みを進めることは、農業と土の物質循環をどうしていくかという観点からも重要ですよね。

叶 その通りです。酪農家は価格競争力をつけるために規模拡大を進めています。そうすると家畜糞尿の処理が問題になってくるんですよ。糞尿の処理ができないから、規模拡大ができないということがあ。この問題が一番のネック。ライ麦の提案もこれに絡んでいてね。水田でコメだけ作っているだけなら、とてもそのまま堆肥はまけない。だけど裏作でライ麦を作れば、堆肥を十分に吸収してくれるから、翌年の稲作に影響しないんですよ。だから効果的に堆肥を吸収してくれるというのは非常に大事な話であって、これを解決できてはじめて規模拡大ができる。

昆 叶先生と同じような意味合いで僕はトウモロコシを提案しているんです。それも水田農家が子実トウモロコシを作るんです。いま配合飼料価格は1kg当たり70円を越しているんですよ。円安が進めばもっと高くなる。ただ、いまは水田転作で飼料



叶芳和

■プロフィール（かのう・よしかず）

1943年、鹿児島県奄美大島生まれ。一橋大学大学院経済学研究科博士課程修了。元・財団法人国民経済研究協会理事長。拓殖大学国際開発学部教授、帝京平成大学現代ライフ学部教授を経て2012年から現職。主な著書は『農業・先進国型産業論』（日本経済新聞社1982年）、『赤い資本主義・中国』（東洋経済新報社1993年）、『走るアジア遅れる日本』（日本評論社2003年）など。

を作ると10a当たり3万5000円の交付金が付く。実は北海道の長沼で柳原君という読者がトウモロコシを作ったんです。それを運賃込みで兵庫県の養鶏業者に50円で売ったんですよ。このうち運賃は10円なので、実質は40円ぐらいでいける。それにトウモロコシも吸肥性は良いですから。これから作ってくれる農家を増やしていきたいと思っています。

叶 それはいいですね。

昆 それなのに、いまは交付金がつくから餌米とか飼料米とかが増えている。何しろ10a当たり8万円も交付されるんですからね。さらに耕畜連携すれば1万3000円足され、9万3000円になる。交付金だけで9万3000円ですよ。すごい金額ですよ。

円安は イノベーションの好機

昆 餌に関する補助金をみても、赤字分を補てんするようやり方をしていますよ。

叶 それは経済原則に反します。価格が上がったら、それを節約するイノベーションを起こすべきです。ところが、補助金で飼料高騰分を補てんとすると、節約は進まない。そもそも配合飼料を多く与えると牛の母体

を悪化する。そのような補助金より酪農の産業構造そのものを変えていくべきです。餌の供給構造を変えればいい。そうすると、そういう対処療法的なことに金を出さなくて済む。イノベーションを促進させるために金を使えばいい。

昆 でも、現実にはイノベーションさせないために金を使っている。

叶 そうですよ。いずれにしても水田の使い方、表作だろうが裏作だろうが有効に使っていくことが大切です。耕作放棄地は駄目ですよ。条件が悪い場所ばかりなので、産業としては不適合です。政治家は自分たちの関心を買うために耕作放棄地を解消する話をしますが、そんなことより優良農地である水田を有効に使っていくべきです。

昆 無理やり開墾した場所が残っているんですよ。

叶 その通りで、農民が使いたくないから放棄地になっているだけですよ。誰も借りたくないわけ。そんな場所は山や池に戻せばいいわけですよ。地目変更すれば放棄地じゃなくなるわけだ。これは実は現場の農家の人達の発想です。畑になっているから耕作放棄地であって、それを林にすればいい。肝心なのは水田をどう使っていくかですね。一番の優良農地（水田裏作）を遊ばせておく手

はない。

昆 そして、イノベーションしようと挑戦する人たちにお金を使ってもらうことですね。

叶 そうですね。酪農家の力量の差は大きいけれど、経営力が低くてもつぶれずに残っているのは、今の乳価で飯が食えるからです。だから乳価を少し下げたほうがよいかもしれないですね。

昆 高すぎるんですよ。

叶 そう。ただ、今は餌代が高くなったから、利潤が圧縮されてくる。あの意味ではいい機会なのかな、と。この方が危機感からイノベーションの促進になる。

昆 いまの畜産利権って滅茶苦茶じゃないですか。たとえば餌が高くなったらその分を補填してくれるわけですから。畜産農家の読者が話していたんですが、牛を飼っていて破綻する人間って、よっぽど経営能力がないんですよ。どうしたって破綻できないようになっていんですよ。それから彼は飼育頭数が1000畜共済は100万円ほど。で、彼は共済を止めたんです。いい獣医さんがいけば、費用は100万円以下で済むから。共済があるためにね、農家はどんどん獣医を使っちゃっている。それで合理的な経営判断をしな

くなる。酪農の乳価の問題と共済がね、畜産農家を無能にしているんです。

叶 だから人材革命が起きない。

昆 そうですね。

叶 ドル高円安になって経営を改善しなくてはいけなくなっていますよ。

昆 こういうショックが起きないと変化が起きないでしょうね。むしろ円安というかドル高が、本当の危機を感じさせるんじゃないかと思えます。

叶 でも、そうした気持ちを餌代の補てんによって政治家がまた壊そうとしていてね。

昆 政治家や役人はどうすれば経営改善につながるかはよく分かっているんですけど、それを実行してしまえば彼らの居場所がなくなっちゃうからね。

叶 物事がいい方向に変わる動きがある時に、交付金でそれを壊すというのが困るんですよ。

昆 イノベーションに対して出さなきゃいけないのに、イノベーションを妨げる交付金にしてしまう。

叶 何だか文句ばかり言っているけど、やっぱり言わざるを得ないんですよ。

TPP時代の酪農経営

昆 日本はいよいよ7月に環太平洋パートナーシップ協定（TPP）交渉に参加します。これで国際競争力の議論も進むと思いますが、この点について叶先生はどう考えられますか？

叶 製品の差別化をしていくべきではないでしょうか。この間北海道の浜中町農協に行ったんですが、ここは素晴らしいですよ。

昆 確かにあそこの農協はいいですよね。

叶 この農協は酪農家185戸、経産牛1万3635頭で生乳生産量は10万tあるんです。それを全量、タカナシ乳業に卸している。それがアイスクリーム「ハーゲンダッツ」の原料になっているんですね。浜中町は消費者が一番人気のブランドの原料に選ばれている。こうなれば自由化しようがしまいが一切関係ないわけです。

昆 価格だけではなく顧客に求められる農業であればいいということですよね。

叶 そう、浜中町農協は完全に製品を差別化できている。全国には色んな酪農協があるけれども、トレサビ

リティーが確立されているのはあそこだけです。そのうえ大体3分の2の農家が放牧している。これは消費者にとってイメージが良いでしょう。だからどんな競争相手であっても彼らは闘える。TPPに参加したって関係ない。所得はすごく高いよね。70頭ぐらいの飼育頭数で3000万円から4000万円あるわけですよ、家族経営でね。それで夕方6時には子どもたちと一緒に食事できるような生活を送っているんですよ。

昆 放牧だから、仕事も楽になる。

叶 向こうの乳量ほどのぐらいですか？

叶 7000〜8000kgぐらいです。

昆 多くはないですね。でも、いまの酪農家は乳量を多くして病気を増やして、多大なコストを払ってしまいでしょ。

叶 乳量を増やしているのは世代交代したばかりの若い人たちに多いですね。たいがいどこも赤字なんです。彼らは大学で乳量を絞ることばかり勉強してきたから。それだから配合飼料をたくさん食わせるんですよ。配合飼料を食わせると、餌代がかかるだけじゃなくて牛の母体が悪くなりますよ。

昆 北海道でもね、ニュージールランド型の酪農、放置酪農が結構増えて

ますよ。

叶 その方がいいね。とにかく餌をたくさん食わせるということは、牛を殺しているわけだから。世代交代した親父さんたちは授業料だと思っで息子の様子をみています。酪農家が乳量を上げるために配合飼料をたくさん食わしてしまうのは、結局赤字を増やしているのと同じなんです。だからどう経営していくかを

もっと考えないといけない。よく考えている農家は、小さくても大きな利益が出ている。逆にモノを考えないから規模拡大しても、結局赤字を増やしている。

昆 ええ。

叶 酪農はまだ技術格差や経営力格差が大きく、平準化していません。「幼稚産業」と言えるでしょうね。逆に言うと、向上の余地が大きいといえます。だからこれからの酪農には夢があるということですよ。

昆 繰り返しになるけど、それに挑み続ける農家を応援する政策で

あつてもらいたいですよね。決して農業政策が要らないといっているわけじゃない。ただ、農業が官営産業ではなくて、民間産業になってもらいたい。経営者は農水省ではなく農業者ですから。

叶 そうですね。

昆 いや、今日は貴重なお話を伺うことができました。ありがとうございました。

